

世界の「味の素」の創業者

すずき さぶろうすけ
鈴木 三郎助(2代) (1868-1931)

味の素



『鈴木三郎助伝』
より

§ 人物データファイル

出生

慶応3年12月27日(1868)相模国三浦郡堀内村(現・神奈川県三浦郡葉山町)に、父初代鈴木三郎助、母ナカの長男として生まれる。幼名泰助。弟忠治、ほかに早世した妹があった。父初代三郎助は、穀物や酒類の小売のかたわら日用品の販売も行い、質商も兼ねる「滝屋」を営んでいた。勤勉で、進取の気性と商才に富んだ人物であった。

生い立ち

明治8年(1875)12月に父が亡くなると、泰助は幼くして家督を相続する。明治10年(1877)、相州藤沢の豪農三贅八郎右衛門が陽明学者小笠原東陽を招いて開塾した耕余塾に入る。明治13年(1880)、浦賀の米穀商・加藤小兵衛商店に奉公に出され、4年間商業の見習いをする。主人に人柄や才能を認められ信頼された。

実業家以前

明治17年(1884)家業を継いで2代目三郎助(以下、三郎助と表記)を襲名、明治20年(1887)呉服商・辻井繁七の次女テルと結婚する。順調だった三郎助の商売も資金繰りに行き詰まり、一攫千金を夢見て米相場にのめり込んで財産を失う。家計の足しにと、海水浴の流行による避暑客相手に間貸しを始めた母ナカは、客である大日本製薬技師の村田春齡から、葉山の海岸で豊富な「かじめ」を焼いてヨードを造ることを勧められ、明治21年(1888)秋、嫁のテルとともに試行錯誤の末、ヨード製造に成功する。明治23年(1890)長男三郎の誕生後、大きな投機に失敗した三郎助は相場から足を洗い、本格的なヨード事業経営に取りかかる。

実業家時代

ヨード事業は順調で、ヨードカリなどの二次製品製造まで拡大、明治26年（1893）葉山に工場を新設、「鈴木製薬所」の看板を掲げた。弟忠治も勤めを辞め、家業になったヨード事業に参加、技術担当として工場を管理する。三郎助は、営業担当・工場全体の統括という役割分担ができる。日清戦争期には硝石製造にも進出、明治34年（1901）東京出張所開設、明治37年（1904）同業者の棚橋寅五郎の東京麻布の工場を譲り受け東京工場兼事務所とし、翌年に逗子工場を設置、その翌年に千葉県館山と三重にヨード工場設置、と事業を拡大していく。明治39年（1906）関東沃度同業組合が結成されると初代組合長に推された。明治40年（1907）日露戦争後のヨード業界の不況を打開するため、大蔵省主導で鈴木製薬所を含む関東大手業者3社を統合して日本化学工業株式会社が設立されると、三郎助は専務取締役役に就任したが、事業拡大に意欲的な三郎助は、他の経営陣と意見が合わなかった。同年、統合から切り離していた葉山工場を母体にして合資会社鈴木製薬所を設立する。

昆布の「うま味」を研究していた東京帝国大学教授・池田菊苗^{きくなえ}は、明治41年（1908）7月「グルタミン酸塩を主要成分とせる調味料製造法」の特許（第14805号）を取得、三郎助に事業化を持ちかける。

三郎助は、池田が「味精」と呼ぶその調味料に興味を持つが、新しい商品が消費者に受け入れられるものか、慎重に調べ（料理店へ試用依頼、各界の名士を招いての試食会など）、食通の作家・村井弦斎^{げんさい}の高評価もあり、9月29日、特許を共有、新調味料の工業化を決める。弟忠治が技術製造面、息子三郎が販売面を担当した。10月、日本化学工業の麻布工場の実験室を借り、製造実験開始。大量生産のため、原料は小麦粉になる。名前も「味精」では「酒精（アルコール）」等と似ており薬品を連想させるということから、「味の素」となった（明治42年（1909）12月24日に商標登録）。いわゆる「美人印商標」（東京新富町の芸者をモデルに描いた、割烹着に「味の素」の字を配したものは、明治41年（1908）11月17日に商標登録され、昭和48年（1973）まで使用された。三郎助は、安全性の問題に配慮

して、内務省の東京衛生試験所に味の素の無害評価試験を依頼し、無害証明をうけている。

明治41年（1908）12月、逗子工場で味の素の本格製造が開始されるが、大変な困難が伴った。3ヵ月後、最初の味の素が出来上がるが、未知の新商品ゆえ、思うようには売れなかった。三郎助、三郎を中心に市場開拓、販売ルート整備、販売促進や、広告宣伝（味の素初の新聞広告掲載は、明治42年5月26日「東京朝日新聞」）に苦心する。

三郎助は、明治43年（1910）7月に日本化学工業株式会社の専務を辞任、同社の株式を売却しその資金を味の素事業に充てる。明治45年（1912）4月、合資会社鈴木商店を設立、形式的に三郎助の個人事業であった味の素の製造・販売と合資会社鈴木製菓所の仕事だった製菓事業を、名実ともに一本化する。

味の素は小麦粉を原料とするため大量に副産される澱粉が経営上の難題だったが、綿布の糊付け用として紡績工場に売ることによって、製造原価を引き下げ、高価だった味の素の値下げにつなげる。

大正期に入り、味の素の売れ行きが伸びると、逗子工場では生産の限界となり、また、製造上多量の塩酸を使うために発生する塩酸ガスや、澱粉の廃液といった公害問題もあり、大正3年（1914）9月、川崎に大型の工場を設置し、大量生産体制をつくる。この時、塩酸法から硫酸法へ製法を転換したが失敗、三郎助は躊躇することなく硫酸法の設備を一切破棄し塩酸法への再転換を決意する。川崎工場での塩酸法による味の素の製造開始は翌年4月、同時に逗子工場は閉鎖された。

第一次世界大戦期の化学薬品事業発展の機会を逃さず、三郎助は、鈴木商店の事業を拡大させた。味の素事業にも成立の見通しがついたと判断した三郎助は、大正6年（1917）6月、経営規模拡大を図って、株式会社鈴木商店を設立する。また、この時期に電気化学工業にも進出した。

大正9年（1920）三郎助は株式投機に失敗、会社の存続が危ぶまれる事態となったが、切り抜ける。その後、鈴木商店を味の素事業を中心に堅実主義の方針で再建していく。1910年代半ば頃から「味の素の原料は蛇であ

る」というデマが広がり、売上げに悪影響を及ぼすに至って、大正11年（1922）、「味の素」は断じて蛇を原料とせず」という声明を各新聞紙上に発表する。味の素の売上げが増大し始めた頃、期限切れを迎えることとなっていた特許についても、御木本真珠に次ぐケースとして大正12年（1923）7月25日、6ヵ年延長が許可された。同年、関東大震災では、川崎工場や東京・京橋の本社社屋に甚大な被害を被ったが、三郎助は自宅を復興計画本部にし、迅速な復興を指揮した。大正14年（1925）12月、株式会社鈴木商店を設立、合資会社鈴木商店および従来の株式会社鈴木商店の事業を継承する。海外での販路拡張も推進していく。

大正15年（1926）三郎助は、調味料発明の実施者として、豊田佐吉、御木本幸吉とともに帝国発明協会より功労賞を受けている。昭和2年（1927）味の素は宮内省御用達となった。

社会・文化貢献

三郎助は、関東大震災時、川崎工場から小麦粉3,500袋を放出させ、東京市芝区や川崎工場付近の3ヵ町村に無料で配布させるなど救護に尽力し、感謝状を受けている。

また、三浦郡教育会や葉山の小学校等のために寄付を行い、郷土の教育のために貢献した。

晩年

昭和4年（1929）4月、初のアジア市場視察、その後各地で開かれた味の素発売20周年記念祝賀会に出席、翌年は東信電気の諸工場視察や得意先訪問など、晩年の三郎助は国内外を駆けめぐって活動した。20周年を機に本店ビルの建築を決意し、定礎式は昭和5年（1930）4月に行われたが、完成を待たず、三郎助は自邸の棟上げ式の3日後、昭和6年（1931）3月29日に死去した。享年63歳。鈴木家の墓所、葉山光徳寺に眠る。

関係人物

池田菊苗 化学者。帝国大学理科大学助教授在職中の明治32年（1899）にドイツ留学、後、ロンドンに少時滞在、夏目漱石と交流があった。明治

34年（1901）帰国後、東京帝国大学教授に就任、日本に物理化学の学問領域を導入し、化学業界における理論研究の開拓者・指導者として足跡を残す一方、実用的な応用研究にも関心を持つ。昆布のうま味の研究で、4つの基本味である甘・酸・鹹・苦のほかに「うま味」があり、その本体がアミノ酸の一種、グルタミン酸であり、グルタミン酸ナトリウムにすると、うま味が強くなることを発見、これを調味料として工業化することを模索する。特許取得後、当時化学薬品工業界で著名であった三郎助に事業化を依頼。これが新たな調味料「味の素」として商品化された。池田は、大正6年（1917）、財団法人理化学研究所設立に参加、化学部長となる。

武藤山治 ^{さんじ} 実業家。副産される澱粉を紡績社に売ろうとなった際、明治44年（1911）、三郎助と三郎は鐘淵紡績社専務の武藤山治を訪ねている。武藤が興味を示し、検討が進められ、鐘淵紡績社は鈴木商店の澱粉を採用することを決定した。武藤とはその後も親密な関係が続いた。

森轟昶 ^{のぶとる} 実業家。三郎助は、味の素の事業と並んで、発電から一貫する電気化学工業会社として東信電気株式会社の事業も手がけている。東信電気は、塩素酸カリ製造のための安価な電力入手を目的に、大正6年（1917）8月に設立した電力会社である。発電所建設では森轟昶が活躍している。遡って明治44年（1911）、三郎助は、千葉館山にあった工場を総房水産へ譲渡しているが、その時の会談の相手が森であった。第一次世界大戦後の恐慌で行き詰まった総房水産の森が、三郎助に助けを求め、大正8年（1919）、東信電気が総房水産を合併、森も東信電気に移っていた。森は、三郎助の配慮で大正15年（1926）日本沃土株式会社を設立した。三郎助は、森の進言で昭和3年（1928）昭和肥料株式会社を設立、森が専務に就任した。三郎助死去の際、親のように慕っていた森は、あたりかまわず号泣したという。昭和肥料が初の国産硫酸を生産したのは、三郎助死去直後の4月3日のことだった。森コンツェルンの日本電気工業（前身が日本沃土）と昭和肥料が合併して昭和14年（1939）昭和電工ができる。

エピソード

ヨード事業の草創期、横浜の薬種問屋友田嘉兵衛が、販売や資金面で鈴

木家に助力したが、三郎助はその恩義を忘れず、次女のトミ、三女のトモ、五女寿^{とし}の名前の「ト」はいずれも友田の「ト」の字を頂いたものだという。

また、子煩悩な三郎助は、娘を結婚させても手放すことを嫌った。長女ヒサの伴侶百太郎、次女の伴侶六郎を婿養子にした（後に本家、忠治家と共に鈴木四家を形成、同族会の有力なメンバーとなった）。

神奈川との関わり

生まれも育ちも神奈川。味の素の生産も神奈川で始まった。現在、川崎事業所がある「鈴木町」は、昭和12年（1937）味の素の創業者・鈴木三郎助にちなみ町名変更された。また、京浜急行大師線の駅名も昭和19年（1944）に「味の素前」から「鈴木町」になっている。

§ 文献案内

著作

まとまった単行書等は確認できない。

「私の生ひ立と事跡」鈴木三郎助手記 『鈴木三郎助伝』故鈴木三郎助君伝記編纂会 1932 第2編p1-5 〈Y、Yかな、K〉

社史

『味の素沿革史』味の素株式会社内味の素沿革史編纂会編 味の素 1951
〈Y、Yかな、K〉

『味の素の50年』味の素編 味の素 1960 〈Y、Yかな、K〉

『味の素株式会社社史1』味の素株式会社社史編纂室編 味の素 1971
〈Y、Yかな、K〉

戦前編（社史1）と戦後編（社史2）の2分冊。昭和44年（1969）春、「味の素」発売60周年にちなんで企画された。三郎助の事跡については、「第1章 鈴木家と化学工業」「第2章 「味の素」の工業化」「第3章 「味の素」の販路拡大と経営の波瀾」に詳しい。先行の『味の素沿革史』、『味の素50年史稿』（非公刊）とは「まったく異なった角度、すなわち“経営史”的視点に立って…企業の主体的活動を中心に記述することを基本方針とし」（「編纂をふりかえって」より）ている。

『味をたがやす 味の素八十年史』味の素株式会社編纂 味の素 1990
〈Yかな、K〉

『味の素グループの百年』味の素株式会社編 味の素 2009 〈K〉

創業100周年事業の一環として発刊された。三郎助の事跡については、「序 生産開始への道」「第1章 創業と模索」「第2章 試練の克服」に詳しい。なお、「正史」としての本資料のほか、「従業員版」（日本語・英語）「海外小冊子」「WEBサイト」「社史の小部屋（味の素イントラサイト）」を作成したとあり。

伝記文献

『鈴木三郎助伝』 故鈴木三郎助君伝記編纂会 1932 〈Y、Yかな、K〉

三郎助の死去の翌年に刊行された。三郎助の足跡、談話、逸話、池田菊苗ほか関係者の追悼文、趣味に関する追懐などが掲載されている。

「鈴木三郎助」『日本実業家列傳』木村毅著 実業之日本社 1953
p443-457 〈K〉

『鈴木三郎助傳 森轟昶傳（日本財界人物伝全集18）』石川悌次郎著
東洋書館 1954 〈Yかな〉

「「はたらき」一家の総師 鈴木三郎助」道面豊信[語り] 『事業はこうして生れた 創業者を語る』2版 実業之日本社 1956 p111-132 〈Y〉

「Case 5 マーケティング活動の先駆者 森永太郎と鈴木三郎助 5-B 鈴木三郎助 味の素の創業者」『ケースブック日本の企業家活動』法政大学産業情報センター、宇田川勝編 有斐閣 1999 p110-120 〈K〉

「第2章 長瀬富郎と二代鈴木三郎助 国産新製品の創製とマーケティング 三 二代鈴木三郎助と「味の素」」佐々木聡著 『日本の企業家群像』佐々木聡編 丸善 2001 p53-66 〈K〉

参考文献

「味の素グループの百年」味の素KK

<http://www.ajinomoto.co.jp/company/history/story/index.html>

（参照2011-11-14）

「京浜急行大師線 鈴木町駅 かわさき区の宝物シート」川崎区役所区民協働推進部地域振興課まちづくり推進係

<http://www.city.kawasaki.jp/61/61kusei/kigyoshimin/pdf/5-9.pdf>

(参照2011-11-14)

<矢島薫>

コラム 鈴木家の女たち

「味の素」は、鈴木三郎助（2代）の母ナカや嫁のテルがいなければ、この世に生まれなかったかもしれない。村橋勝子氏の『カイシャ意外史社史が語る仰天創業記』（日本経済新聞出版社 2008）に、「味の素—母と嫁とは同志の仲」として、味の素を製造する以前の鈴木家における女性の活躍が紹介されている。夫を早くに亡くし、幼い子供らを育てながら、残された店を懸命に守ったナカ。三郎助がやっと家業を継いだかと思えば、米相場で財産を失い、生活費にも困るようになった。ナカは、危機に瀕した家業を少しでも挽回させるため、カジメがヨードの原料になると教わって、自ら選んだ嫁テル（三郎助の弟忠治の嫁は、テルの妹だが、これもナカによる）とともに、ヨード製造を決意する。専門家からの教示があったとはいえ、素人の身での挑戦はどれほどの苦労があったろうか。ヨード事業が本格的に始まると、ナカは、誰よりも早く起き、率先して働いた。人づかいもうまかった。村橋氏は「スーパーウーマン」と評している。嫁テルも、娘の行く末を案じた実家から「帰ってきたい」と諭された際、「たとえ乞食におちぶれても里方へ戻る気はありません」と断ったという。

こういう女性たちの懸命さが、三郎助をヨード事業へ向かわせ、鈴木家を救ったといえるだろう。